

「日本の計画 Japan Perspective」(要旨)

「日本の計画 Japan Perspective」の背景

1. 「日本の計画 Japan Perspective」が目指すもの

日本学術会議は、日本を代表する科学者コミュニティとして地球規模の問題群解決に積極的に貢献することを目指している。「日本の計画」は、21世紀の人類が歩むべき道を設計すべく、人類が直面するさまざまな問題を俯瞰的にとらえて、根源的な問題構造を明らかにし、30～50年後を見据えた解決の方向性を提案している。

2. 20世紀における科学技術の発展と科学者の社会的責任

20世紀の100年間に爆発的に進歩した科学技術は、人類社会を豊かにし、ライフスタイルと価値観を大きく変化させたが、一方で軍事技術の高度化、環境破壊などももたらした。人類は物質・エネルギー消費を拡大し、人口を爆発的に増加させる一方、かつてない規模で凄惨な世界戦争を引き起こした。「日本の計画」は、このような20世紀の歴史を踏まえ、科学者は自らの研究成果が人類社会に与える影響をこれまで以上に慎重に考慮しなければならない、との認識に立脚している。

3. 21世紀の問題群 - 既存の価値観を見直す必要性

20世紀における人類社会の変動と科学技術の発展の結果、多くの領域で既存の価値観のとらえ直しが必要とされてきている。とくに、東西冷戦構造の終結に伴い、21世紀の人類社会が対処すべきさまざまな課題が前面に出てきた。「日本の計画」は、経済活動が巨大化・国際化、高速化し、地域的・民族的な価値観が錯綜する中で、我々人類が、地球という限りある惑星でどのように生きるかという根本的な問題に直面していることを明らかにしている。

4. 地球的規模の問題群に対する日本からの貢献の可能性

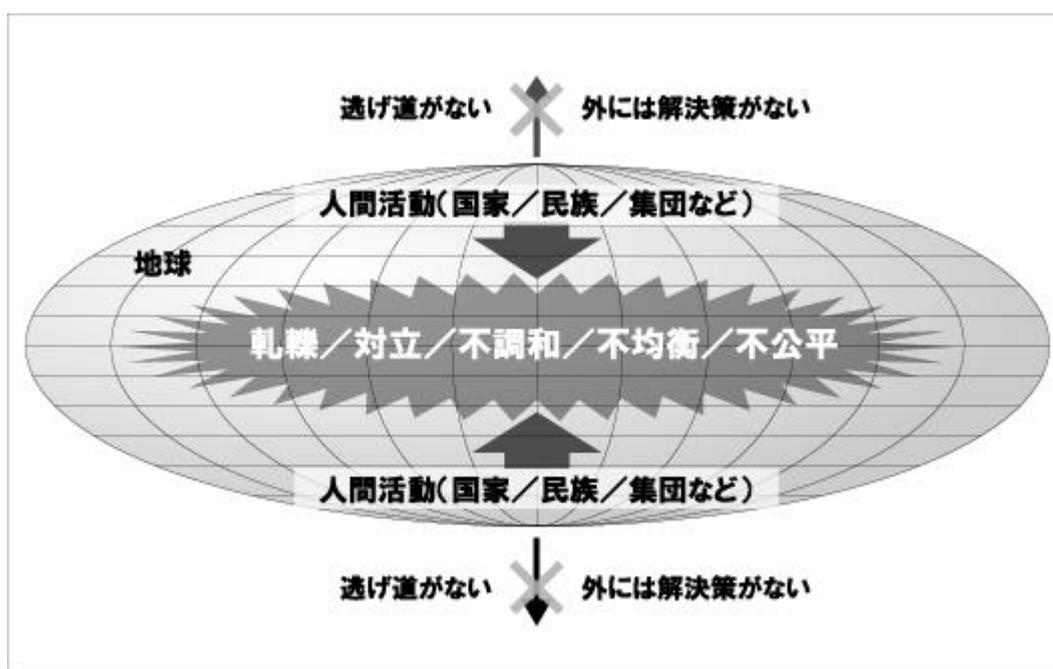
日本は東アジアの文化的土壌に西欧的科学技術をいち早く導入し、世界第二位のGDP規模を有するに至った。しかし現在では、日本社会のシステムが個人の能力を十分に発揮できる可能性を阻害する構造になっているなど、多くの課題を抱えて低迷している。「日本の計画」は、日本の閉塞状況の打破を通じて、「21世紀の人類が歩むべき道」を見出そうとしている。

。「日本の計画 Japan Perspective」の提案

1. 人類史的課題への対応

(1) 人類史的課題としての「行き詰まり問題」

「日本の計画」は、21世紀初頭の人類史的課題は、根本的には地球の物質的有限性（以下、地球の有限性）と人間活動の拡大とによって生じた「行き詰まり問題」としてとらえることを提案する。



地球上における人間活動のさらなる拡張という問題は、有限な地球の内部で解決せざるを得ないが、すでに地球の有限性が見えてきてしまったという意味で「行き詰まり問題」と考えることができる。20世紀初頭に欧米列強が突き当たった地理的拡大の限界という「行き詰まり問題」が、人類社会全体に対し、さらに深刻な形であらためて提起されるに至っている。

「行き詰まり問題」の構図

(2) 21世紀の学術に求められる人類社会に対する貢献：持続可能な開発の具体化

人類社会が共有すべき目標として、広く受け入れられつつある「持続可能な開発 (Sustainable Development)」という概念は、「行き詰まり問題」を解決する方法論なしには実現しがたい。科学技術が人類社会の隅々にまで浸透した現在、ここで科学者コミュニティが果たすべき役割と責任は果てしなく重い。世界各国のアカデミー、および科学者の国際組織は、人類共通の課題である「持続可能な開発」に向けて協力・協調を強化しており、日本学術会議は日本を代表するアカデミーとして積極的な貢献を行っていくべきである。

2．進化する人類社会へのシナリオ

(1) 「行き詰まり問題」への視点

「行き詰まり問題」を解決する方法には、「問題を取り巻く環境を変革する」タイプと「問題に直面している主体の意識や価値観を変革する」タイプの2つがある。20世紀の人類社会は科学技術による前者のタイプの解決方法により発展を遂げてきたが、21世紀において持続可能な開発を可能とするためには、後者のタイプの解決方法を備えた個人や集団の意思決定システムの進化が必要である。

(2) 「持続可能性を獲得するための進化」(Evolution for Sustainability) を遂げた人間社会の展望

地球の有限性の中での人類社会の持続可能な開発は、欲望の抑制や欲望の方向転換を通じて確保されるべきである。その過程では、文化の多様性 (Diversity) を尊重する中でさまざまな格差や不平等を解消し、人類社会の基本的な普遍性に基づく平等性 (Equality) を確保する必要がある。このような、欲望の抑制や方向転換、多様性の尊重、平等性の確保に特徴づけられる意思決定システムの進化を、「持続可能性を獲得するための進化」(Evolution for Sustainability) と呼ぶこととしたい。

(3) 適切な情報循環システム構築の必要性

人間社会の持続可能性は、物質・エネルギー循環と情報循環が同時かつ調和的に実現されることによって、そしてそのときに限り獲得される。「持続可能性を獲得するための進化」を具体化するには、科学技術による物質・エネルギー循環の利用に加え、これまで学術的に体系づけられてこなかった「情報循環」に着目し、両者の調和を図ることが必要である。

(4) 「多様性の受容とその上での新たな展開」を図る情報循環の創出

以上を要約するならば、人類の「行き詰まり」を解決する基本的な考え方として、「多様性の受容とその上での新たな展開」を可能にする情報循環システムを構築し、「持続可能性を獲得するための進化」を実現するのが、「日本の計画」が提起するシナリオである。これは人類社会、日本社会ともに当てはまる基本的なパラダイムである。

3．学術により駆動される情報循環モデルの構築

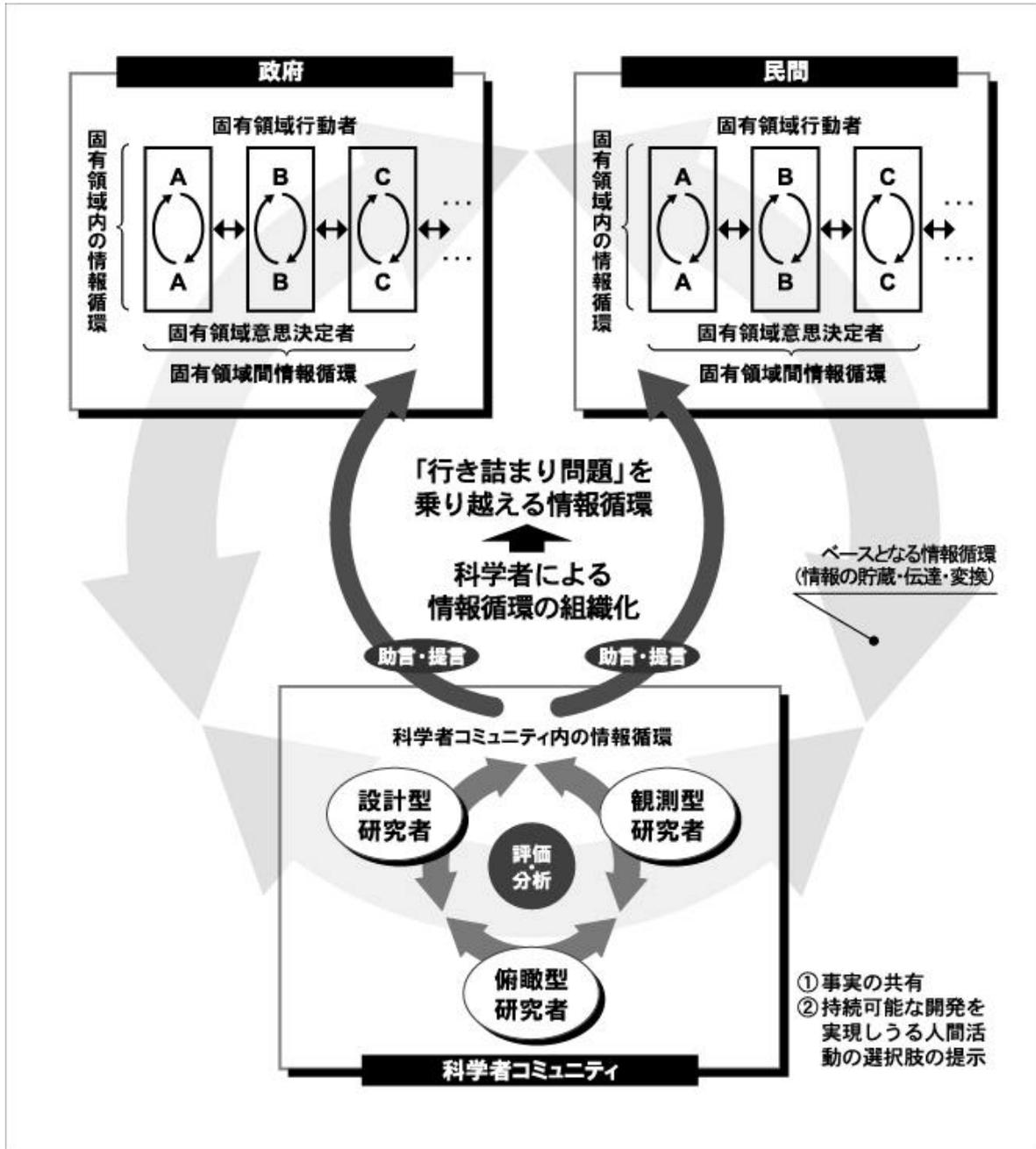
(1) 学術アカデミーが行なう助言としての「日本の計画 Japan Perspective」

「日本の計画」は、日本学術会議が、日本の学術アカデミーとして、「持続可能性を獲

得するための進化」に向けて何をすべきかを、日本および全世界に向けて発信するメッセージである。

(2) 助言：学術により駆動される情報循環モデルの実現

「持続可能性を獲得するための進化」を実現するためには、科学者による情報循環の組織化と、これを原動力として「行き詰まり問題」を乗り越える「学術により駆動される情報循環モデル」の実現が必要である。



学術により駆動される情報循環モデル

4. 4つの再構築への挑戦

日本学術会議では、物質・エネルギー循環と人類社会の関係、および人類社会における情報循環のあり方に関する大きな4つの問題群を設定し、特別委員会において、科学者による情報循環の組織化に向けた先駆的な研究活動を開始した。

(1) 人類の生存基盤の再構築

人類の生存基盤の再構築には、循環型社会の実現が必須条件となる。また農業や森林を生産基盤として見るだけでなく、自然環境の価値も含めてその多面的機能を評価し調和のとれた価値観を形成することも重要である。そして究極的には、恐怖や欠乏からの自由に基づく安全・安心の確保を持続可能な形で実現することが必要である。

(2) 人間と人間の関係の再構築

人間と人間の関係の再構築による新しい社会システムの実現においては、従来多くの社会で見られてきた男性中心的社会から男女共同参画社会への移行、物質至上主義に偏る価値観から、これからはこころを重んじ、多様性を受容する価値観への転換が求められる。

(3) 人間と科学技術の関係の再構築

科学技術の発展は人類の生存基盤の強化に貢献する一方、さまざまな副作用をもたらしており、人間と科学技術の関係の再構築が求められる。

(4) 知の再構築

科学技術の発展に伴って、新たな俯瞰的研究や新しい学術体系の構築などの「知の再構築」が求められる。また教育体系においても、21世紀の人類社会の課題解決に資する人材の育成が必要とされる。そのために最も重要な必要条件は、関係者間の行動の調和である。

・「日本の計画 Japan Perspective」の基盤 ～ 特別委員会における検討の概要～

「日本の計画」は、第 18 期日本学術会議において取り上げた 8 つのテーマについて検討するために設置した 8 つの特別委員会を基礎として、とりまとめを進めてきた。特別委員会は、それぞれに担当する課題についての検討を行なうのと並行して、「日本の計画」に対応した審議を行い、本委員会の検討に反映させてきた。

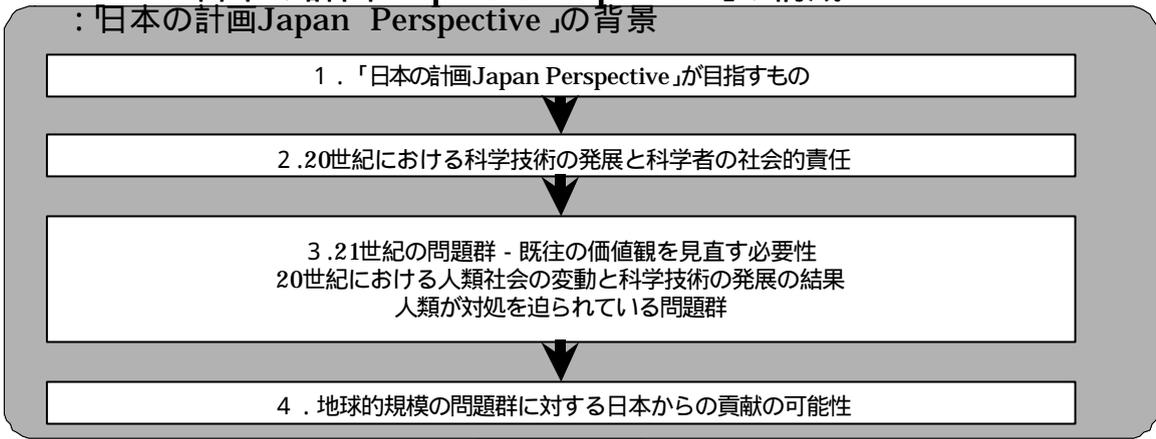
- 1 . 循環型社会特別委員会
- 2 . 農業および森林の多面的な機能特別委員会
- 3 . ヒューマン・セキュリティの構築特別委員会
- 4 . ジェンダー問題の多角的検討特別委員会
- 5 . 価値観の転換と新しいライフスタイル特別委員会
- 6 . 生命科学の全体像と生命倫理特別委員会
- 7 . 情報技術革新と経済・社会特別委員会
- 8 . 教育体系の再構築特別委員会

各特別委員会はそれぞれの課題の集中的に検討するものであるが、日本の計画委員会は 8 特別委員会の検討の成果を基盤として「日本の計画」の策定を行なった。「日本の計画」は 8 特別委員会の検討の成果を集成したものではなく、特別委員会の検討の成果を俯瞰的観点にもとづいて統合し、策定した計画である。各特別委員会の報告はまとまり次第公表される予定である。すでに公表された報告書は以下の 3 つである。

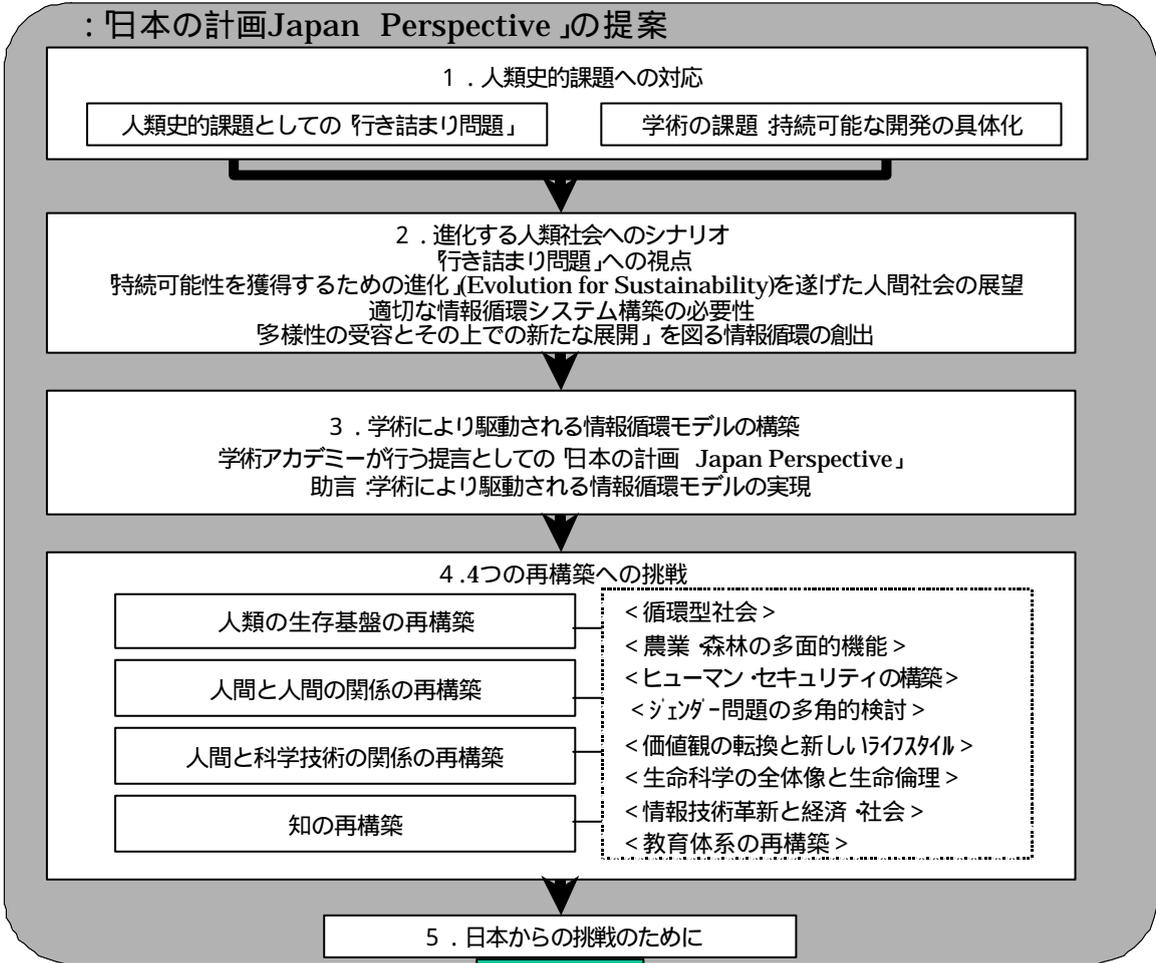
- 『地球環境・人間生活にかかわる農業及び森林の多面的な機能の評価について』
(2001 年 11 月)
- 『価値観の転換と新しいライフスタイルの確立に向けて』(2001 年 11 月 26 日)
- 『21 世紀の高等教育が直面する課題 - - 教育のグローバル化への対応』
(2002 年 4 月 4 日)

日本の計画「Japan Perspective」の構成

：日本の計画「Japan Perspective」の背景



：日本の計画「Japan Perspective」の提案



III：日本の計画「Japan Perspective」の基盤 特別委員会における検討の概要

【運営審議会附置日本の計画委員会委員名簿】

委員長	黒川 清	(副会長)
幹事	岩槻 邦男	(第4部・価値観の転換と新しいライフスタイル)
幹事	森 英樹	(第2部・ヒューマン・セキュリティ)
委員	渥美 和彦	(第7部・生命科学の全体像と生命倫理)
委員	熊澤 喜久雄	(第6部・循環型社会)
委員	河野 博忠	(第3部・情報技術革新と経済・社会)
委員	酒井 泰弘	(滋賀大学経済学部教授)
委員	坂元 昂	(第4部・教育体系の再構築)
委員	祖田 修	(第6部・農業・森林の多面的機能)
委員	永井 克孝	(三菱化学生命科学研究所所長)
委員	中島 尚正	(放送大学教授)
委員	蓮見 音彦	(第1部・ジェンダー問題の多角的検討)
委員	吉田 民人	(副会長)

(五十音順)

【「日本の計画 Japan Perspective」レビュー委員名簿】

- | | | |
|-----|------|--------|
| 第1部 | 福井文雅 | (哲学) |
| 第2部 | 浜川清 | (公法学) |
| 第3部 | 関口尚志 | (経済史) |
| 第4部 | 土居範久 | (情報学) |
| 第5部 | 山本明夫 | (応用化学) |
| 第6部 | 近内誠登 | (農学) |
| 第7部 | 橋本嘉幸 | (薬科学) |